

1 章

底型

ルール 1 4～5年下げ、3段下げ完了の銘柄を買う

ルール 2 底練りの中の2番底形成を待つ

ルール 3 下に來ての6連続陰線に注意。

W型の底、または小さくとも毛抜きの出るのを待つ

1.

3段下げと2番底

月足の規格

一般的に「チャート分析」というと、明確な答え、客観的な正解を期待する人が多いが、実際には人によって見方が大きく異なる。

林投資研究所が毎月開催しているF A Iクラブの例会でも、月足を広げて「ここが1番底、ここが2番底……」とやると、別の人が、「いや、1番底はそうだけど、2番底がここで、そっちは3番底だ」などと言う。

レベルが高い低いの問題ではなく、見る人によって解説が違ってくるのだ。これは、実際の値動きが“つかみどころがない”ものであることを示している。

また、これに好みの問題が加わると、議論できないほど広がってしまう可能性すらある。だが、同じ規格の月足を見ている者同士、黙っていても通じ合う部分がたくさんある。

銘柄を検討しているとき、「〇〇さんは今日休んでいるけど、こういう動きはあの人の好みだよな」とか、「これは注意銘柄に選定しても問題なさそうだけど、××さんがここにいたら反対しそうだなあ。あの人、こういう動きは嫌いだから」といった会話が交わされることもある。

月足の規格をそろえることは絶対で、月足で値動きを見ることに身体ごと慣らすことが重要である。独りで複数の銘柄を見て比較するときにも一定の感覚が必要だし、異なる感覚と異なる好みをもっている他人と一緒に月足を見て銘柄を決めるためには、いろいろな面でカタチをそろえておくことが求められる。

タテヨコ同じ比率で縮小した月足をみんなで眺めたことがあるが、F A I 規格原寸のものと並べると、ムリを感じる。縮小したサイズで一時的に感覚を調整し、同じように縮小した月足を眺めていけば問題ないが、やはり絶対的な大きさというのも大切だと感じる。

天井と底でさえ

月足を見て細かい解説を加えようとする、前述したように、人によってバラバラになる。ところが、大きな流れ、長期のトレンドでも、捉え方が驚くほど違っていると感ずることがある。

もちろん個々のメンバーは、落としどころとか一応の標準形とか、そういった共通の基準をもとうとしている。だから銘柄選定の作業が完全にストップしてしまうようなことはない。

しかし、なんとなく「当てよう」と考えてしまう部分もあるから、「うう～ん」とうなってしまう場面も少なくはない。

2009年、多くの銘柄が安値圏にあった。しかし大部分のものは03年以降の上げ相場があり、それ以降の下げがあり、天井の起点をどこに取るかという点について、はっきりした数式があるわけではない。だから、05年や06年にかけての上げと、その後の下げを“どう捉えるのか”で感じ方が違ってくる。

次ページ以降、月足の実例を挙げながら説明していこう。

できる限り平易な説明にするが、個別の銘柄に言葉をつけた時点で私の主観が入ることを承知して読んでほしい。

ルール 1 4～5年下げ、3段下げ完了の銘柄を買う

ルール 2 底練りの中の2番底形成を待つ

ルール 3 下に來ての6連続陰線に注意。

W型の底、または小さくとも毛抜きの出るのを待つ

F A I 投資法では、下げきった銘柄だけを買って選定する。

その大前提を示した上記3つのルールから、月足を見ていきたい。

3段下げと6陰線

次ページの月足は、1885東亜建設だ。2000年以前の安値は1964年の112円だから、08年の100円割れは驚くほどの水準だ。ちなみにバブル期には、1,520円の高値（89年3月）をつけている。

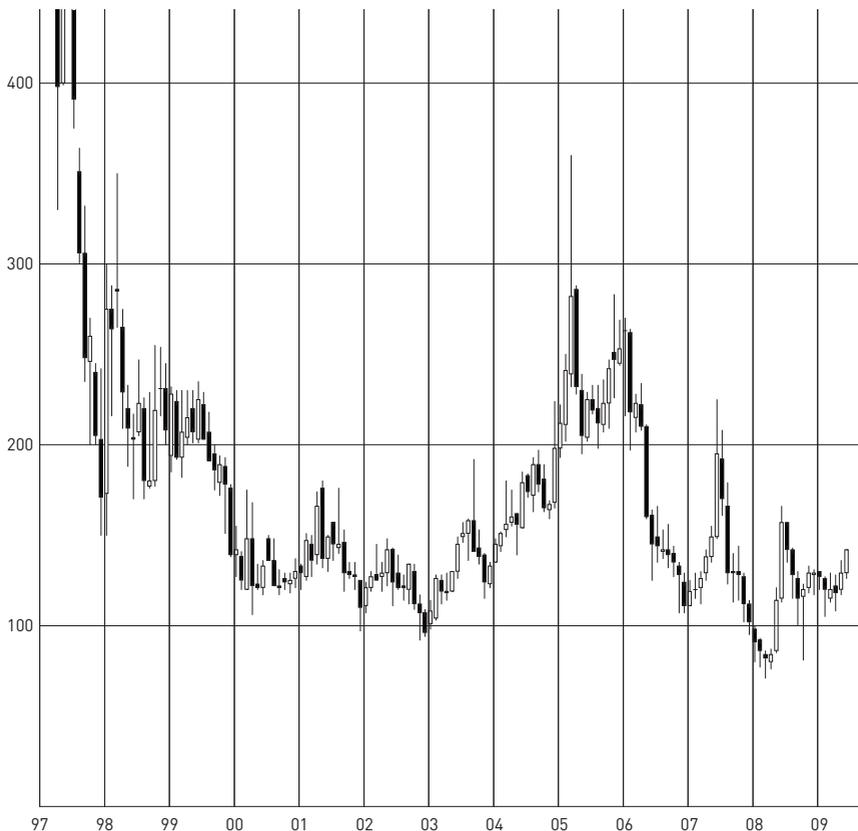
03年以降にかかるくひと相場出しているが、89年の天井から10年以上かけて下げて100～300円のレンジに至っているのだから、あらためて天井の起点を05年と設定する必要はないだろう。

05年を境とした上げ下げを中期（適切な表現かどうかかわからないが）の波として考えるのがシンプルだと思う。

しかし、もし中期の上げ下げに的を絞って観察した場合は、05年3月にみせた長い上ヒゲを含めて細かく観察することになる。

そんな観点でいくと、05年以降の下げが「3段下げ」といえる。

| 図表1-1 | 1885東亜建設の月足



さて、実際に選定しよう（選んで買おう）と思ってこの月足を見ると、05年に200円台で推移した部分がとりあえず目障りだ。

前述したように、05年以降で「3段下げ」をみせているのだが、「この固まりが今後上げていった場合の重しになるかもしれない」と考えるだろう。この高値で買った人のポジション、いわゆる因果玉が、上げてきたところで売りにくる、俗にいう「やれやれ売り」

によって抑えられてしまう可能性を考えるのである。

しかし、08年の100円割れに向かう連続陰線に注目したい。

ポジションを持たずに見ているだけでイヤになるほどの下げだが、陰線がこれだけ連続した場合は、「整理が進んだ」とみるわけだ。

“ダラダラ下がりの大下がり”の中で、200円台で買ったポジションを残していたとしたら、どう感じるのか想像してほしい。

おそらく、なかなか行動できない状態に陥り、見れば見るほど、考えれば考えるほど気分が悪いだろう。だから少し遅れ気味になるものの、「ほかの銘柄を買う」きっかけになったり、純粋に損切りを決心して腹を立てながら売らさう。

そういう投げが続くのが、このような連続陰線だ。

1885東亜建設は、バブルの天井から見ても3段下げ、05年以降も小さな（F A I 投資法の感覚だと）3段下げ、そしてルール3の「6陰線」も当てはまっている。

6陰線が示すもの

ルール3の6陰線について、もう少し説明しておこう。

連続陰線で下げると、整理が進み、しこりが大幅に減り、上がりやすい状況がつけられる。これが、買う銘柄を選定する上で注目する理由だ。

「下げている」「弱い」という表現は間違っていないが、それは過去と現在を軸に考えた場合の結論にすぎない。

「これから先はどうなるのか」「これから儲けるために、どう行動しようか」と考えるのが相場だから、「下げてきた」「陰線が続い

た」という状況から、「整理が進んだ」「強い」と考えるのが実践的なのである。これが、ルール3の意味だ。

ルール3には、「W型の底、または小さくとも毛抜きの出るのを待つ」と、追加の条件が示されている。これについて説明しよう。

「陰線が連続して下げてきた。水準が低くなって割安感が増してきた」というだけで短絡的に買ってはいけない、ということである。

下げて下げて安値に到達したということは、将来、大きく上がる可能性がつけられた、ということだ。

だが、あくまでも可能性であり、具体的な行動（買い）につながるほどの確信には至らない。

実際には、例えば「兆し陽線（3章で解説）」が出現するなど、「トレンドの変化」を感じさせるものがほしい。しかし、その前に「下げ止まる」ことが必要で、その下げ止まりを示唆するのが「W型の底」あるいは「毛抜き」ということだ。

「毛抜き」というのは短い期間のW底で、並んだ2本の月足とか、数カ月隔てた2本の月足の安値がほぼそろっている状況を指すケイ線用語だ。

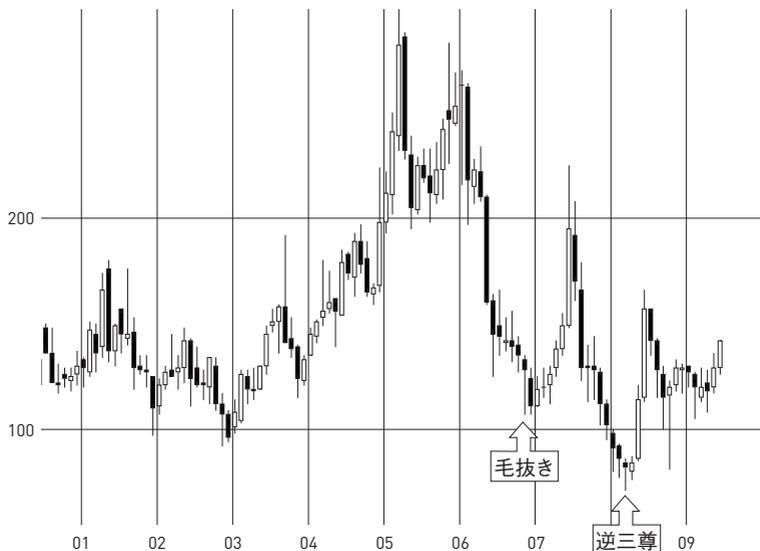
毛抜きの実例は、前出の1885東亜建設にもみられる。

次ページ図表1-2の月足を見てほしい。2006年の連続陰線の末期、11月と12月の安値がそろっている。この2点底が毛抜きだ。

では、次の連続陰線のあと、つまり2008年の1～4月はどうか。これは毛抜きとは呼べない。

だが、3月の下ヒゲを頂点とした逆三尊で、実際には毛抜きと同じように、小さいながら下げ止まりを示唆する形と判断できる。

| 図表1-2 | 毛抜きと逆三尊（1885東亜建設）



2番底

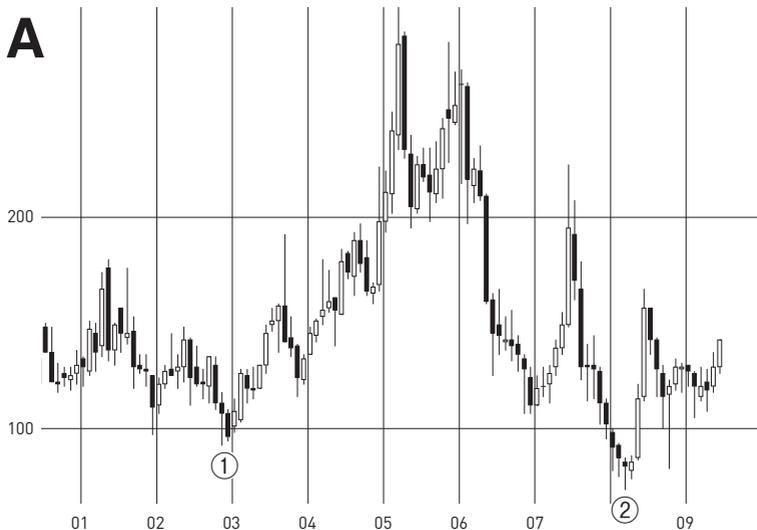
さて次に、ルール2にある「2番底」について考えてみたい。

説明のために、同じ1885東亜建設の月足のうち、安値の部分だけを3つのパターンに分けた（A、B、C）。図の中の①は1番底、②は2番底を示す。

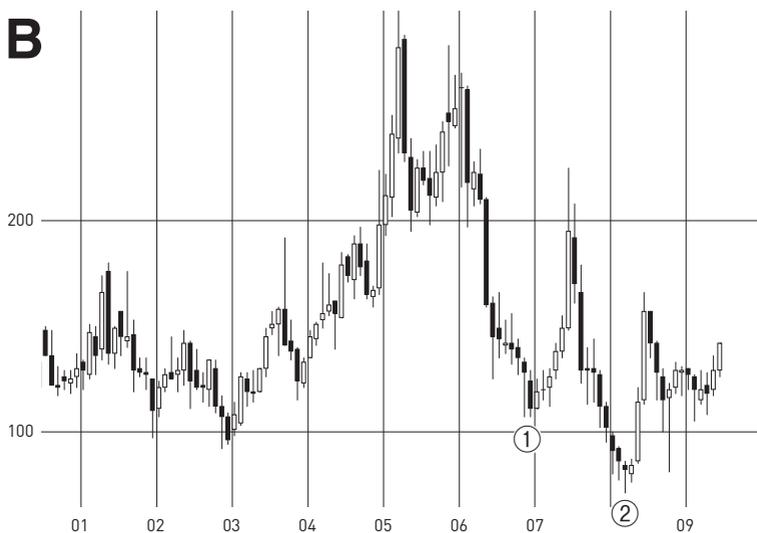
Aは、あくまでも大きな目で見ても、03年以降の上げ下げを「底練りの一部」と捉えたときに、1番底、2番底を定義した結果だ。「いや、私はそうは考えない」という意見もあるだろうが、「いや、それは間違っている」とは言えないだろう。

03年以降の相場がもっと大きければ話は別だが、これくらいなら許容範囲と考えるべきだ。

| 図表1-3 | 2番底のパターンA



| 図表1-4 | 2番底のパターンB



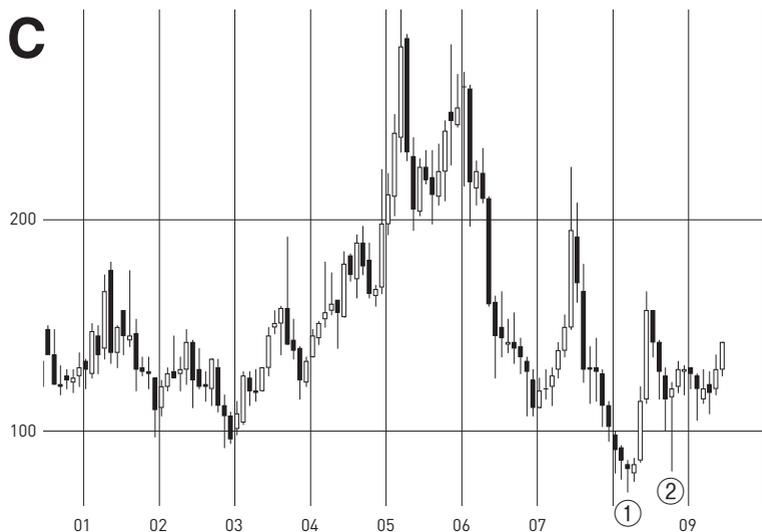
これに対してBとCは、05年を天井として見たときの定義だ。

前ページBから説明しよう。06年に連続陰線で下げたところを1番底とし、翌年の07年前半に上げたあとの連続陰線後の安値、つまり08年の安値を2番底としている。これだって“あり”だ。

しかし、1番底をよく見ると、05年からの下げ過程の2段目とみることもしきる。やや中途半端な後付け解説的な感じも否めない。

では、3つめのCはどうだろうか。05年以降の下げで3段下げが完了したところが1番底で、長めの陽線2本で戻したあとの安値を2番底と定義している。Bの矛盾っぽい部分は解消されているが、08年後半の下ヒゲ1本で「底」と定義するところに違和感を覚える人もいるかもしれない。

| 図表1-5 | 2番底のパターンC



数字が意味するところ

1番底、2番底の定義を3つ紹介したが、自分の感じ方を再確認してほしい。

私が気づかないで見方があるかもしれないし、私が示した3つのパターンを「ヘンだ」と否定する意見だってあるかもしれない。

しかし、このような定義づけや解説に、どんな意味があるのかを考えてもらいたい。相場を行う上で「どこを1番底と定義したか」などということは、実は何の意味ももっていない。

「どこで、どれだけ買って、どこで売って、いくら儲かったか」だけである。

もう少しだけ言えば、そういう個別の損益は、継続して売買する中ではどうでもいいことで、「死ぬ瞬間にいくら残っているのか」といった大げさなところまで広げたり、あるいは金銭に対する価値観と人生哲学などという世界に及ぶずっと手前の段階で、本当はどうでもいいことなのである。

基本に戻って考えてみる。F A I 投資法では（F A I 投資法に限らず、すべての売買がそうだが）、株価変動をトレンドで捉える。

そしてルール of 文言を基準にして月足を観察する直接的な目的は、「上げ相場への転換を探る」ことだ。

この点にフォーカスして、1番底、2番底の定義をもう一度考えてほしい。結論として求めるのは、「どこを1番底とするのか」「どこを2番底とするのか」ではなく、2番底を確認して「強い」とか「底打ちだろう」と感じたり、あるいは「まだまだだな」と判断することによって、その銘柄をどう扱うのかを決定することだ。

月足を描き足して棚に入れておだけなのか、次の日も眺めるために机の上に置いておくのか、明確に売買の対象として選ぶのか、という具体的な行動が問題なのだ。

こうやって考えていくと、2番底の「2」とか3段下げの「3」には、実は数字的な意味が極めて薄いのではないかと思える。実際に、ズバリそうだと思う。2番底とは、

一定の時間をかけて下げ止まりを確認すること

であり、3段下げとは、

安値圏に達したことを確認すること

である。

実際に、これだけメチャクチャな（つかみどころのない）マーケットの変動を相手に、細かい理屈を明らかにしようなんて、成立しないのではないか。

もっと視点を高めておくほうが、自然でムリがないはずだ。

「株なんて、上がったり下がったりだよね」などとやんわりまとめてしまったら、それこそ身もふたもない。

具体的な行動には、なかなかつながらない。だが、枝葉末節なことにとらわれることは避けたい。現実的なバランスを求めたいのだ。

大きな月足の効用

月足をはじめとするチャートを見るときは、細かい定義や解説の言葉ではなく、言葉にならない「見た感じ」が最も重要だ。

その感じ方をつくっていくための入り口として言葉があるのだし、方向修正をするための補助としても言葉が必要だ。

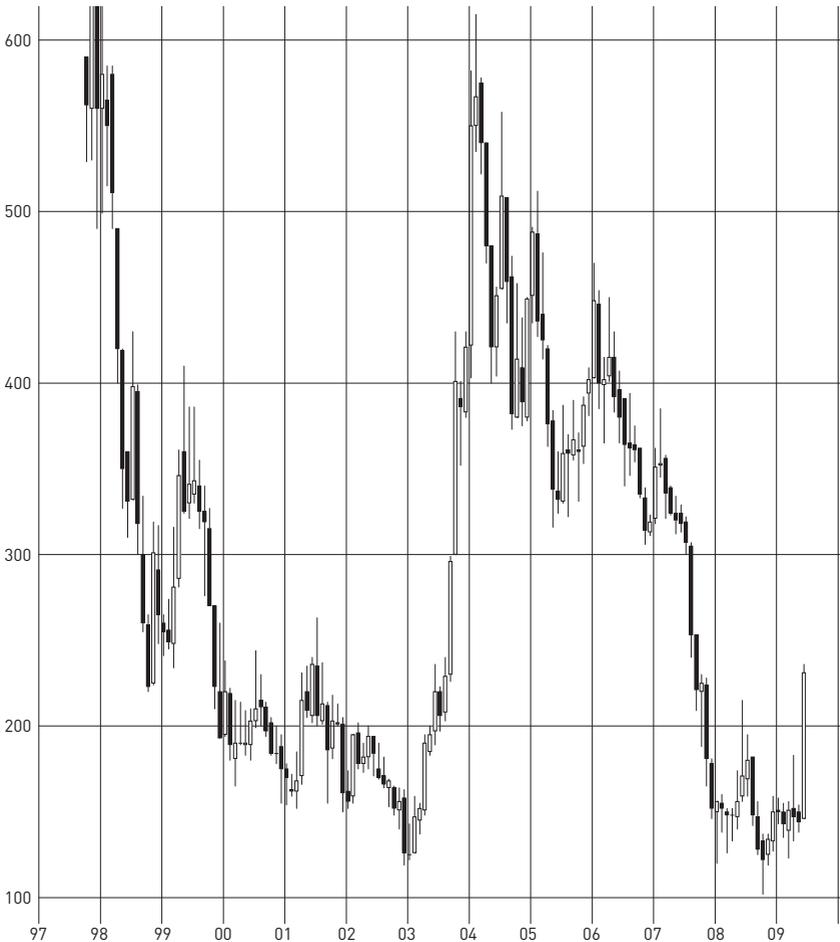
| 図表1-6 | 6621 高岳製作所の月足



33～34ページに2銘柄の月足を掲載した。説明を加えずにチャートだけを載せるので、1885東亜建設と見比べてみてほしい。

東亜建設にコテコテとくっつけた私の解説を見たり、あるいは無視したりしながら、これら2銘柄の動きを感じてもらいたい。

| 図表 1-7 | 7993サンウェーブの月足



あくまでも中心になるのは「見た感じ」であり、月足に慣れてしまえば、全体の姿を見て「あっ、いいな。買おう」という判断が行われるだけで問題ない。儲けることを目的に売り買いを継続することが、十分に、しかも自然に実行できるはずである。

2.

注目する上げ下げの期間

底練りと上げへの転換

序章では「前文の解説とルールの位置づけ」というタイトルで、ルールの文言を数式的に捉えてはいけない、ということを書いた。

前項では「3段下げと2番底」というタイトルで、ルール1～3の意味を解説したが、その際に序章で書いたことを踏まえ、月足を見たときの感覚、つまり「見た感じ」の大切さを強調した。

ここでは、前項で説明したことを再確認しつつ、F A I投資法における長期トレンドの観点を確認してみたい。

まずは、ルール1～3の文言をあらためて見てみよう。

ルール 1 4～5年下げ、3段下げ完了の銘柄を買う

ルール 2 底練りの中の2番底形成を待つ

ルール 3 下に來ての6連続陰線に注意。

W型の底、または小さくとも毛抜きの出るのを待つ

前項で、「3段下げ」は「下げきっている」ことを意味する、と述べた。ここで、「下げきっている」というのが、どれだけの期間においてのことなのかを考えてみたい。

次ページに示す月足チャートを見ながら話を進めよう。

これは、以前にF A Iクラブで実際に買い選定し、見事に大暴騰をみせた5631日本製鋼所の月足だ。

まずは、全体の解説を試してみる。

安値をつけたポイントを、A、B、C、Dで示した。

まずはAで底値圏到達が確認できるというのは、あとの解説でなくても、その時点で可能なことだろう。2000～2001年には、2回安値をうかがったあとで数年間の保合レンジを上抜いている。

これで「上げの兆し」とみることもできそうだが、日柄が足りない感じは否めない。

さて少し上昇したもののCで安値を更新し、Dにかけて連続陰線で下げて再び安値を更新した。

もしBのあとの上昇を兆しと判断して選んでいたら「ちょっと早かった」ということになるが、迷ったあげく見送っていたとしたら「待ってよかった」となる。微妙な分かれ道だ。

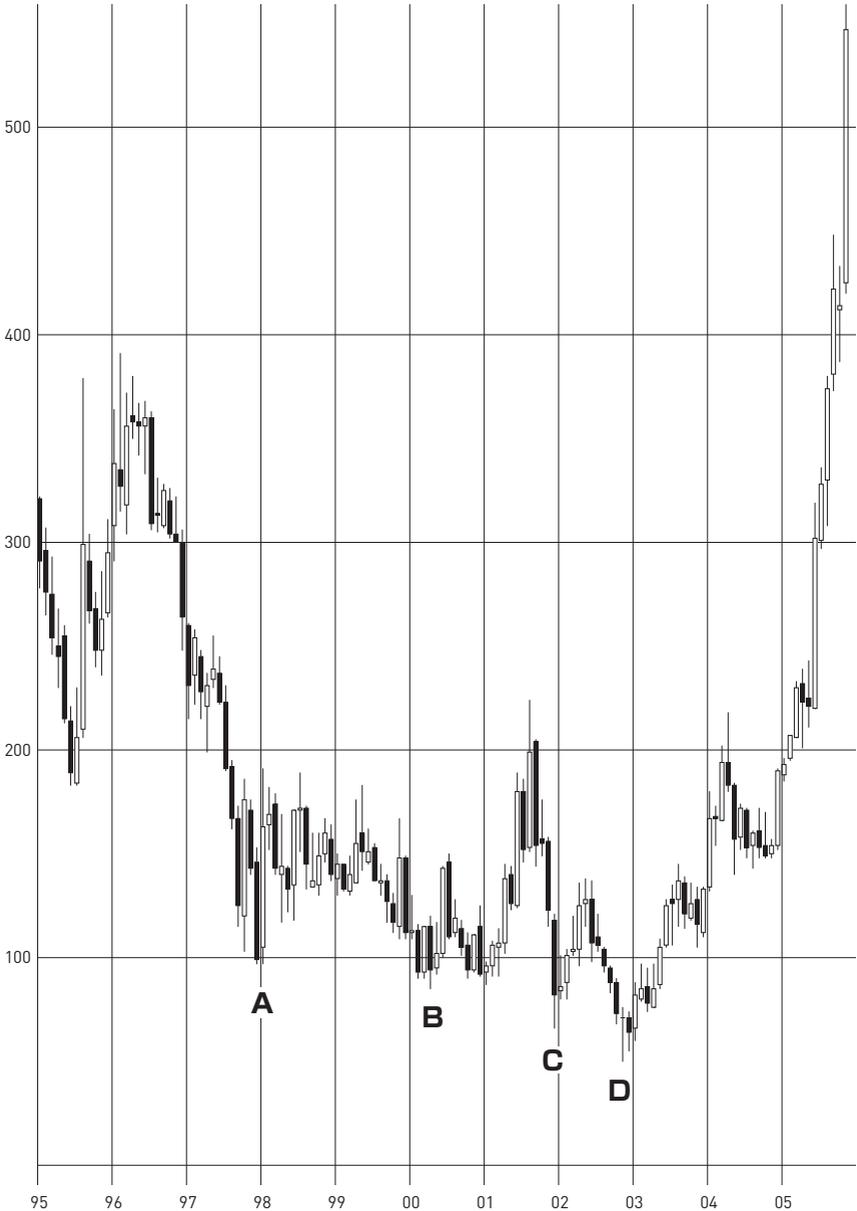
この底型について、もう少し解説を加えよう。

Cのあとの戻りからDにかけての連続陰線は、ルール3の6連続陰線に当たる。

この銘柄は、Aで安値圏に到達し、5年間に及ぶ底練りの末期でCの1番底、Dの2番底プラス6陰線で「整理がついた」ことが確認できる。

また、Dのあとの2003年の上げを“兆し”とみることができ、04年に一時200円を超えたところで完全に上げトレンドに入ったと判断することができる。

| 図表1-8 | 5631日本製鋼所の月足



上げ下げの期間

さて、例えばBの安値で買ったとしたら半年から1年で2倍になっている。

Cで買ったとしても、半年ほどでかなりの率の上昇をみせている。それぞれ、十分に満足な利益を得ることができる波動だ。

2つの波を取り上げた。どちらもそれなりの率で動いているが、F A I 投資法で長期の波動を見るうえでは、全く無視する上げ下げだという点が重要だ。

F A I 投資法で月足を見る限りは、「Bで買えば儲かっていた」といった発想は生まれないのだ。

AからDにかけての動きをひとまとめにして「底練り」と考え、少なくとも200～300円、できれば400円、500円、600円と大きく上がっていく波動を期待して「長期波動が上げに転じたかどうか」をひたすら観察するわけだ。

「目先」というと、日々の上げ下げを気にする投資家向けの情報では、かなり短い期間を指していることが多い。

でも株の長期波動は、飽きてしまうほど長いのが実際だ。

現実の売り買いとなると、人間が自然にもっている感覚や心理の揺れなどを考えて、例えば「早めに利食いするほうがいい」といった実践論が出てくる。

また、日々の終値を見てみると、1カ月単位で「すでに上げ始めた」などと考えるのも自然なことだ。

ところがF A I 投資法では、半年くらいの期間なら「目先」と片づけてしまう。

月足の観察は、場帳で日々の値動きを見て「今日か、もう少し待つか」と考えるときの感覚と上手に切り離しておきたい。

低位株投資では、まず、この長期の上げ下げに照準を合わせて考える必要があるのだ。

大きく見る

どんな分野、どんなものごとでも同じだと思うが、つつい短い期間や狭い範囲で考えてしまう。

結果として、自らの手で選択肢を少なくしているケースが多いと思う。例えば月足チャートを見ているうちに、「いつ買うか」という考えに縛られていたりする。

「買わない」という選択肢があることを忘れてしまうのだ。

F A I 投資法の基礎である“月足による長期波動の観察”は、実際の売買の感覚とかい離しているのだから、強く意識して長い上げ下げに目を向け、半年とか1年単位の上げ下げは「5年、10年単位のトレンドが変化したかどうか」という観点で観察してほしい。

3.

下げ止まり

長期トレンドが基本

前項の終わりに書いたのは、次のようなことだった。

F A I 投資法では、まずは長期トレンドを見る
つい目先の動きに目を向けたくなるが、半年くらいなら目先
と考える

株式投資の手法には、さまざまなものがある。1日の立会時間は日中に限定されていることから、場が立っていない時間、すなわち夜間に“不測の出来事”が起こって翌日逆行することを嫌い、その日のうちに手仕舞いするという考え方もある。デイトレードである。

ポジションを翌日に持ち越すことによるオーバーナイトのリスクを避けるのだが、手数料の負担が増えるし、制約が厳しいことによる損失も考えられるだろう。

個人投資家の場合は、常に日中の動きを追うことが物理的に難しい、多くのプロやセミプロとの駆け引きやしのぎ合いになるからすすめたくない。

しかしデイトレードを好む人は、現在の手数料が極端に安いこと

を理由に、オーバーナイトのリスクを避けることが安全につながると主張する。

ほかにも、例えば数週間で売買する手法（スイングトレード）があるし、数年単位で売買することを好む人もいる。

私は、デイトレードのような超短期の売買には落とし穴があると考えているが、それだって異なる考え方によって否定されることがある。

どの手法が有利かを議論しても意味がない、というのが根本的な答えかもしれない。

投資手法に優劣はなく、それぞれに一長一短がある、好みの問題である、というのが最も間違いのない説明だろう。

さて、数多くの手法が存在する中で、F A I 投資法は、長期のトレンドを基本にして低位株の上げトレンドを狙うやり方である。

実際の売買期間は、個人の好みや感覚に委ねられる。

教科書的には「数カ月以上の期間を見て、のんびりやればいい」といった説明になるし、人気の圏外にある銘柄を選んで売買するのだから、「数カ月を想定して買ったのに数年かかる」ということもあり得る。

だが最初から、数週間とか数カ月で手仕舞いすることを目指す人もいる。逆に、もっと長っ張りの人もいる。

だが、F A I 投資法で月足を見て銘柄選定をする際は、とにかく5年とか10年といった長期の波動に目を向ける。

「バブルの発生周期が短くなった」という指摘があり、F A I 投資法でもその点は議論していく余地があると思うが、月足の見方が大きく変化することはない。

上げ下げの循環

株式市場には、さまざまな立場の投資家が参加している。

これについて説明していきいきがないので「売買益を得ることを目的としている投資家」に絞って考えるが、それでも枚挙にいとまがないほど多様な価値観や考え方が存在している。

一般的には、業績や成長性など、企業の価値が上がるかどうか注目して、株式市場での評価（価格）が上がるか否かを考える。

株式市場というのは、営利を目的とした企業の株式を売買する場だから、当然の考え方だ。

しかし「相場技術論」では、企業価値やその変化という着眼点ではなく、「値動きそのものを見る」というアプローチで利益の出し方を考えていく。

わかりやすく説明するために、株価に影響を及ぼす好材料も悪材料も出ない、「何も起こらない」企業を想定してほしい。

実際にはあり得ないが、モデルとして想定するということだ。

そして、この何も起こらない企業の株価がどうなるのかを考えてみる。

株式市場では、個別企業の評価とは別に、金利、政治、世界経済、地域経済、金融の情勢などによって変化する株式そのものの「人気量」が株価に影響する。

同じ企業が同じ程度の業績を上げて、同じ程度の将来性を含んでいたとしても、前述したような市場を取り巻く環境で株価の水準は大きく違ってくる。

「相場技術論」では、この水準の違いを「人気量」と捉える。

この株式市場そのものの人気量が、環境の変化によって増減することで、市場全体の株価水準が上下するのだが、個別の銘柄も同じように上下動をみせる。

ここで、前述した「何も起こらない」企業の株価を考えてほしい。

何も起こらないのだが、市場全体の人気量が増減することで、その企業の株価も上がったり下がったりするのである。

これが株価の「自律的な変動」といわれるもので、相場技術論の立場では、この自律的な変動を利用して売買益を出そうとする。

F A I 投資法も相場技術論に基づくもので、個別企業の製品とか業種・業態などを考えるのではなく、月足を観察することで長期間の自律的な上げ下げを見ることを最も重要なことと位置づけているのである。

モデルとして示した「何も起こらない」企業は、「うねり取り」の売買対象にふさわしい。3カ月・6カ月の上げ下げを狙う売買における理想的な対象である。

低位株、つまり下値不安が極端に少ないところまで売られた銘柄が大きく上伸する動きを狙う F A I 投資法の対象銘柄は、実際にはもう少し変化がある企業といえるかもしれないが、人気量の変化による自律的な上げ下げを中心に売買手法を考えている点は全く同じである。

下げ止まり

株価の自律的な上げ下げを表現するとき、「循環」という言葉がよく使われる。

上がった株価は必ず天井を打って下がるのが、市場における絶対の法則だ。では下がった銘柄はというと、安値で動かなくなるという消極的な見方があるものの、最も単純に株価の循環を考えたとき、「下がったら上がる」という発想になる。

一定の底練り期間を経過しないと上昇しないのが現実だから、「動かなくなる」という消極的な見方と、「下がったら上がる」という積極的な見方を組み合わせるようにして、

底練りを経て再び上昇する

と考えるのが実践的だ。

F A I 投資法では月足の観察を通じて、安値から再び上昇する直前を狙いたいと考える。これを実現するために注目するのが、上げ始めを示唆する「兆し陽線」だったり、上げの直前を示唆する「三角形」だったりするわけだ。

しかし、とにもかくにも「下げ切っている」ことが第一で、下げきったことを確認する、つまり長期波動での「下げ止まり」を確認することが大切なのだ。

どこが「下げ止まり」か

個人投資家には、「個別銘柄の情報を見ているうちに買いたくなくて、思わず買ってしまう」という心理があるが、月足を見ていてもそんな気分が芽生えるときがある。

これを戒めようとするのが「長期トレンドを見よう」という言葉だ。株価の循環をトレンドによって分類すれば、落ち着いて長期トレンドを観察することにつながるはずだ。

つまり、下げトレンド→下げ止まり→底練り→上げの兆し→上げトレンド、という具合に段階で分けて考えるのである。

では、実際の月足を見て考えてみたい。

わかりやすくするために、前項で示した5631日本製鋼所の底練りを次ページに再掲する。

AからDの5年間が底練りである。だから、Aが下げ止まりだ。

しかし現実では、底練りの最後に安値を更新しながら「上がらない」状況が続いている。

「買い出動する」ことを視野に入れた実践的な意味では、CとDで“ダメ押しの底”をみせたところが本当の意味での下げ止まりといえる。こういう区別をするのなら、Aは「一応の下げ止まり」ということだ。

下に示すF A Iルール1～3で説明すれば、ルール1が「一応の下げ止まり」で、ルール2とルール3はもう少し煮詰まった状態、つまり「再度の上昇をイメージさせる、より実践的な下げ止まり」ということになるだろう。

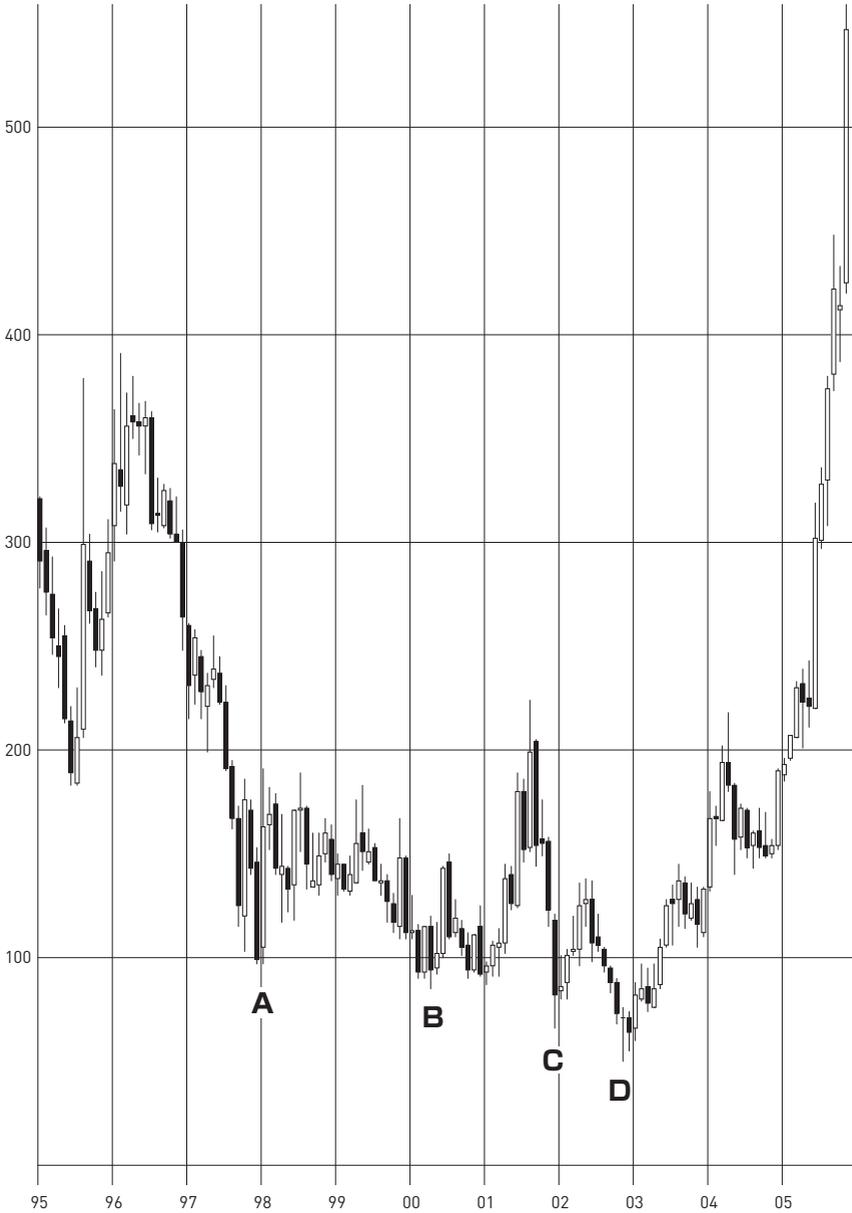
ルール 1 4～5年下げ、3段下げ完了の銘柄を買う

ルール 2 底練りの中の2番底形成を待つ

ルール 3 下に來ての6連続陰線に注意。

W型の底、または小さくとも毛抜きの出るのを待つ

| 図表 1-9 | 5631 日本製鋼所の底練り



4.

株価が動くということ

月足を見るとき基礎

1章では、「低位株投資で月足を見るとき基礎」的なことを、いくつかの角度から解説してきた。

相場技術論によるアプローチ、つまり「株価には上げ下げの循環がある」というチャート分析の前提において、とても大切なことである。

前項は「下げ止まり」について、「水準的な下げ止まり」と「間もなく上がるという、実践的な下げ止まり」に分けて考えることができる、と述べた。

この2つを分けるポイントは、「整理がすんだかどうか」という観点だ。「整理がすんだ」ということは、ストレートに言えば「上がる」ということだ。

株を安値で買うだけでは儲からない。しかし高値で買ったとしても、さらに上がれば儲かる。

つまり、“安いかどうか”という観点だけではなく“動くかどうか”も不可欠なのである。

動きがあるかどうか

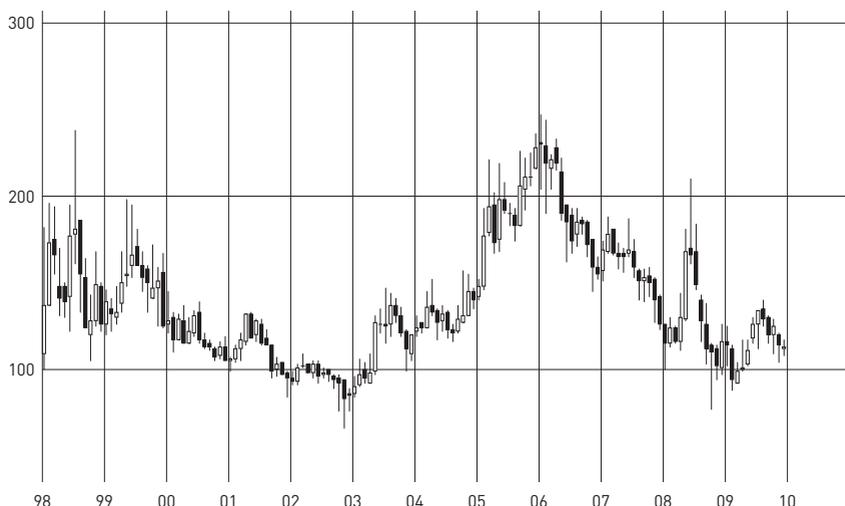
この項のテーマとして挙げた“動くかどうか”という観点は、銘柄選定で重要な事項だ。

例えば、下に示した2052協同飼料の月足を見ると、下値はなさそうに見える。しかし、この期間のチャートでは、動く気配は感じられないし、「下がらない=上がる」という循環の発想で観察したとしても、大きく上がるような印象は薄い。

株を買う場合は、上がり始める直前で買うのが理想だし、人気の圏外にある銘柄を対象とすると、少し期待が外れただけで年単位のズレはあり得る。

だがここで、「動きそうだ」「兆し陽線が出て、動き始めたと判断できる」といった観点を大切にしたいのだ。

| 図表 1-10 | 2052協同飼料の月足



| 図表 1-11 | 1301 極洋の月足



上に示した1301極洋は、2009年9月に買い選定した銘柄だ。

協同飼料と同じように、チャートで示した期間では動きがないから「おもしろくない」という見方もあるが、“上げの直前”を示唆する三角形に近い形が見える（「三角形」については2章で解説）。

過去にも安値の三角形から大きく上げたことがあり、1～2年で期待通り上がるのかどうかを楽しみなわけだ。

見事に小動きになって兆し陽線が出るとか、きれいな三角形が出現すれば、とてもわかりやすい。そんなに都合のいいことばかりではないが、“動きがある”銘柄を選んでうまく乗ろうという観点は、実践的に重要なのである。

例えば、次に示す1884日本道路は明確に動きがあるし、地味な感じだが、7769リズム時計にもはっきりと動きがみてとれる。

| 図表 1-12 | 1884 日本道路の月足



| 図表 1-13 | 7769 リズム時計の月足

